

1. 現在の発掘調査状況（C区）

4月から行ってきた土橋北遺跡C区の調査が終了しました（第1図）。C区の下層では、縄文時代後期（約3,500年前）の土器などがたくさん出土しました。また、前回お話ししたように、下層では地震の痕跡が見つっています。

これまでの調査から遺跡周辺のむかしの地形も少しずつ明らかになってきました。遺跡周辺は細かな起伏をもちながら、全体的には東から西に向かって緩やかに低くなります。遺跡の西側には阿賀野川の旧河道（百津瀧）があります。

これから、西側のA区の調査は始まります（第2図）。遺跡の立地環境を調べることで、縄文時代の人びとが、どのような場所で、どのような暮らしをしていたのか、明らかになるものと考えます。

2. C区下層の出土遺物

下層では、調査区の数か所で出土遺物が集中する傾向が見られました。土器は「小さな破片が集中するもの」と「1つの土器がそのままつぶれた状態で出土するもの」と2パターンがあります。

第3・4図は土器がつぶれた状態で出土したものです。ここでは、複数の土器が倒れるようにつぶれています。土器の口から底までの大きな破片が、折り重なるように出土しています。土器が出土した場所では地震の痕跡が見つっています。おそらく、もともと直立して置かれた土器が地震の影響によって倒れたために、このような形で出土したのかも知れません。

出土した土器については、復元するための洗浄・注記・接合作業を行っています。たくさん出土した土器のなかには、特徴的なものが出土しています。

第5図は深鉢（ふかばち：日常生活で煮炊きを使用した鍋）の破片です。このような模様の土器は「南三十稲場式土器」と呼ばれる土器で、新潟県全域で出土します。



第1図 C区完掘（西から）



第2図 A区調査前現況（東から）



第3図 土器出土状況



第4図 土器出土状況

いっぽう、第6図は深鉢の破片ですが、描かれている模様が違います。三角形や幾何学的模様になります。この土器は「堀之内2式土器」と呼ばれる土器で、関東を中心につくられた土器になります。

土器のほかに石器も出土しますが、種類に偏りがあります。遺跡から出土する石器は、「石皿（いしざら）」や「くぼみ石」など、植物や木の実をすりつぶす際に用いられる石器が多く出土します（第7図）。ところが動物を捕るための狩猟道具である「矢じり」などの狩猟具はほとんど出土していません。

3. まとめ

C区下層の調査によって、土橋北遺跡における縄文人の生活のようすが少しずつ明らかになってきました。

土器では、県内で多く出土する土器のほかに関東地方の土器が出土することから、関東地方の人びととの交流があったことが想像されます。

周辺の遺跡でも「堀之内2式」に似た土器は出土していますが、第6図のようにそっくりなものではありません（第8図）。

どのようなルートで、なぜ土橋北遺跡に持ち込まれたのか、調べる必要があります。

石器では、出土した石器の種類に偏りが見られることから、当時の人びとが動物よりも植物を中心とした食べものをさかんに食べていたことが想像されます。

このことについては、むかしの遺跡周辺がどのような場所であったのか、環境もふくめて考えていく必要があります。

今後検討すべき課題を解決できるように、これからA区の調査をすすめていきたいと思えます。



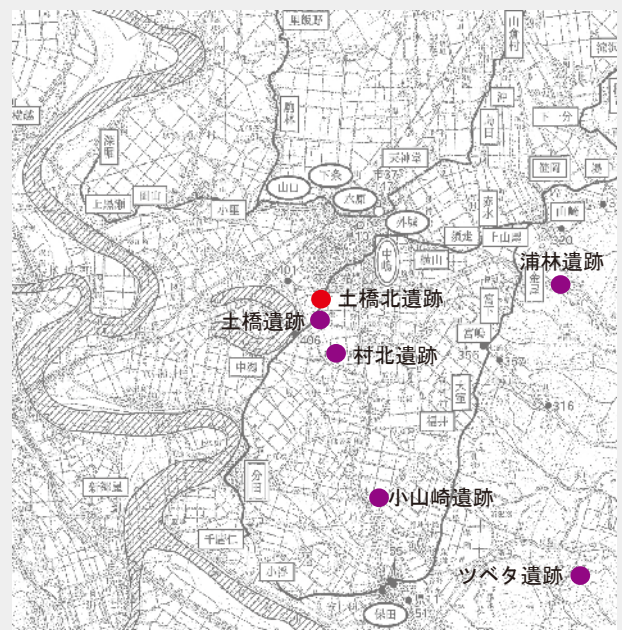
第5図 南三十稲場式土器



第6図 堀之内2式土器



第7図 石皿（右）・くぼみ石（中・左）



第8図 縄文時代後期前葉の遺跡
(古澤 2011 に加筆)